

炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

写真と文 池内文藏

第6話



岩湧山の登山口を示す檜の木に馬を繋いだ瀧覚たちは、坂を上り、開け放たれた庵の門をくぐった。門前で待とうとする雉丸に瀧覚が目で「入れ」と告げる。多聞丸に手を引かれ、雉丸も門をくぐった。庭を掃いていた土地の老婆が来客を告げる。ほどなく黒猫を抱いた立烏帽子の男が表れ、猫を庭に放した。庵のなかは、書院と猫の額ほどの台所のみである。まず多聞丸が名乗り、雉丸にも促した。両者を涼やかに見つめる男を、

―大江どの―と、呼んだ瀧覚対し、男は「毛利時親でござるよ」と返答。茶菓を運んできた老婆が退出すると、瀧覚が懐中から書状を取り出し、男に手渡した。差出人は「楠木右兵衛尉」多聞丸の父・正遠だ。男は一読後「承知し申した」と頷いた。

男を前に、岩湧山の手前で途絶えていた瀧覚の話しが再開される。毛利時親は、源頼朝がまだ平家と戦っていた頃に、ゆくゆく樹立する武家政権の政務の柱にと京から招聘した大江広元の曾孫に当たる。広元はその人脈と知略を駆使し、平家滅亡後に頼朝と反目した義経逮捕を名目に守護職・地頭職を全国に配置するなど政権の礎を強固なものとした。つまり、和田義盛

という「武」と、大江広元という「政」という幕府草創の「要」の末裔が、この奥河内の小さな庵で相対していることになる。かれらが「鎌倉殿」に押し上げた源氏による征夷大將軍が三代・実朝で潰えると、將軍の妻であり母であった北条政子と、その弟義時が実権を握った。その過程において「武」の掌握を望んだ義時によって義盛は肅清され、広元は重用された。大江氏は幕府最大の危機となった承久の乱で広元と嫡男・親広が敵味方に別れ、嫡流が衰退。勝利に貢献した四男・季光は、相模毛利荘を受領し「毛利」を名乗るとともに、和田義盛の従兄弟で、北条との合戦を前に翻意した幕府宿老・三浦義村の女を娶り、名執権と謳われた北条泰時とは相婿かつ、その孫・時頼(第5代執権)に女を嫁がせ、揺ぎない地位のまま晩年を迎えた。

だが、伊豆の流人時代から頼朝を支えた最古参の御家人である安達氏と三浦氏が対立。宝治元年(1247年)の「宝治合戦」で妻の兄・三浦泰村に付いた季光は、娘婿の時頼やその義兄の安達泰盛らに攻められ、三浦一族とともに頼朝の墓所である法華寺で自刃。この戦いで有力御家人の大半を肅清し終えた北条・安達連合は、源氏滅亡後「鎌倉殿」となった公家將軍・皇族將軍はもとより、執権・連署をも傀儡とする得宗(義時に始まる北条家嫡流)専制政を敷くに至る。

—その得宗どのが、死んだ—

瀧覚の呟きと同時に時親が大きく呼吸を吐いた。正遠の便りには、第九代執権で「得宗」である北条貞時の死が簡潔に記されていた。

—時代が、動く—そう言って、振り返った瀧覚の前に、脚の痺れを堪えながら二人の大人の話しに耳を傾け続ける雉丸と、相反するかのよう濡れ縁に寝そべって時親の書物を読み耽る多聞丸がいた。書物の表紙に記された「鬪戦経」の三文字。

「書写したものだから持って帰れ」という時親に、「ここに来て読む」と返す多聞丸。それは大江家相伝の書で、後世まで武士道精神の聖書として読み継がれてゆく。やがて成人した多聞丸は、孫子の兵法とともに「鬪戦経」を生涯の座右に置いた。

多聞丸の軍学の師を務めた時親は、やがて安芸毛利氏の祖となり、その嫡流から戦国の梟雄・毛利元就を輩出する。